焚火の時

君島恒星

目次

炎が落ち着いている焚火台に、新しい薪をくべる。
少しすると、薪はパチパチと音をハゼながら、煙を冬空に放っていった。
落ち着く。
缶ビールをコップに注ぐ。ビール党なので、真冬でも冷えたビールはかかせない。
普通、何を考えながら、ひとりで焚火を眺めるのだろうか？　などと、たわいのない事を考えながら炎を見つめていた。
森林内のキャンプ場の、一番奥にテントを張っていた。
キャンプ場は、僕ひとり。完ソロ状態。自由に出来ると思える半面、少し怖い気持ちも隠せない。
暗闇の森の中から音がした。何かの気配も…動物？　いや、人間…
彼女はジッと、こちらを見つめて立っていた。
ドキッとした。
彼女も目を大きくして、ビックリしているようだ。デニムのズボンに赤く分厚いＡラインコートを着ていた。小顔の色白で、２０代前半に見える。
でも、真冬のキャンプ場の外れに…ひとりで…何故？
変なことに関わり合いたく無かったが、彼女の寂しそうな表情に心が動いた。
「焚火にあたりますか？」
僕は思わず、普通に声をかけた。
彼女は小さくうなずき、薄く微笑みを見せながら、焚火の前に体育座りをした。
「土の上じゃ痛いでしょう。これに座れば…」
アウトドアチェアを彼女に近づけた。いつもアウトドアチェアは２脚持ってくる。足乗せ用に使えば、ハンモックスタイルになれるからだ。
彼女は埃を叩きながら立ち上がり、アウトドアチェアに座った。
そしてため息ひとつ。
僕は黙っていた。今は、言葉はいらない。そう思っていた。

ソロキャンプ にハマり出したのが、４０歳を迎えた頃だった。
初めは妻の目を盗んで、通販で小物から揃え始めた。テントを購入した頃見つかり、ソロキャンプをしたい旨を告げた。
妻は「やってみれば！　その投資が無駄になるかは、行ってみればわかるから」と言った。
続かないだろうと思われたようだ。
だが、初めてキャンプに行った時、焚火に魅了され、ひとり焼肉を堪能した。
星空の写真を撮りたいと思っていたが、なかなか難しい。次こそは、という気持ちには、させてくれる。でも、星空の写真は上には上がいるもので、最近は焚火の動画を撮っては、ネットで公開している。まあ、見る人もいないのだが…
コットという簡易ベッドのようなものを購入した時には、２人用のテントに入らなくて、四苦八苦した。図面のサイズには入るのだが、テントの開口部が小さく、テントの生地が破れてしまうのではないかと思うくらい、無理をして入れている。今でも、インナーテント設置後にムリムリ入れている。でも寝るときは快適である。

　テントが破れてしまったら、新しいテントに買い替えられると、プラスに考える事にしている。

　その日、ネットで調べた初めてのキャンプ場に行った。真冬の平日なので、キャンパーは少ないだろうと思っていたが、予想通り完ソロとなった。管理人さんも夕方には帰ってしまうという。
「今夜は、晴れているけど寒くなるから、気をつけてね」
と言い残して…
　この時期の、このキャンプ場はかなりの氷点下になるようだ。
　キャンプ場の一番奥に秘密基地を設置した。誰にも邪魔されずに、焚火の動画を撮りたいからだ。もしも、フリーで団体さんでも来たら、うるさくてしょうがない。まあ、近くにテントは張らないと思うが…

「ビール飲みますか？」
　彼女は焚火の光を浴びながら、小さく頷いた。
「焚火があったかい…」
　彼女の声はアニメチックで可愛かった。
「わたしのこと、推測してます？」
「まあ、こんな時間に、女性が…ひとりで…山の中から…謎だらけですからね…いつ襲われるか不安だし…」
「襲う？…疲れているからかな？　　ずっと長い間、同じ所にいたものだから、外に出てみようかなって…これでも、思い切ったのよ！」
　引きこもりを、脱したのだろうか？
「どのくらい、そこにはいたのです？」
「どのくらいかしら…同じところではなかったけど…３００年はいたかな？」
「３００…？」
　思わず声に出てしまった。
「今は古民家の旅館ですけど、わたしは皆とお話をしたいの。今の…こんな感じに！
わたし普通に話せていますか？」
　からかっているのか？　　狂っているのか？　　いつしか、遠い世界に誘われているような感じがした。でも彼女は真面目な顔で、真っすぐに僕を見つめていた。
　空気感を変えたかった。
「もう、キャパオーバーだ！！　　飲もう！　　ビール　ビール」
　新しい缶ビールを開けた。
　僕は恐怖を感じていたのかもしれない。人間ではない彼女が、どのように豹変するのか？　　そんな妄想が頭をよぎっていた。沈黙が訪れると、魔物が見えそうだった。その反面「嘘だよ～」と茶化して欲しいという気持ちもある。とにかく頭の中は満杯、沈黙のパニック状態になっていた。

　でも彼女は、相変わらずのアニメ声で話をして、喉をゴクゴクいわせながら美味しそうにビールを飲んでいた。そしてビール缶を凝視しながら
「これ美味しい！」
　と笑顔を見せた。
「お腹は空いていますか？」
「うーん、その感覚…よくわからないの」
「じゃあ、デザート感覚の焼きマシュマロ食べます？　外はカリカリで中はネットリしていて、甘くて美味しいですよ」
「食べてみようかな！」
　彼女は笑顔を見せた。

「あ！ また焦げちゃった！」
「結構下手ですね」
「だって、やったことないから！」
「表面が薄い焦茶色になれば、いい感じですよ」
「暗くて、色がわからない！　あ、また火がついた！」
「ハハハ！　焦げても、それはそれで美味しいですよ」
「ハハ！　本当だ！　ハハハ！」
　彼女は、全身で笑っていた。
「マシュマロを焼いている所を、動画撮ってもいいですか？」
「どうぞ…でも、わたしは撮らないでね」
「もちろん、個人情報保護に徹しますよ。焚火映像の間にマシュマロ焼きのショットだけ入れたいので！」
　映像は彼女の手から先だけを入れて、焼いているところを収録した。

「もし、僕の寝袋で良ければ、テント内で寝てください。僕はここで焚火にあたっていますから」
「寝る？　してみようかな！　寝るって事！」
　彼女はテント内に潜り込んだ。
「ファスナーだらけね！　あ、お願い！　テントのファスナー、閉めて！　これじゃダルマさんだわ！　ハハハ」
　寝袋のファスナーを先に閉めてしまったので、手が出ないようだ。
「おやすみ」
　と言い、テントのファスナーを閉めた。

　焚火のゆらめきを見ながら、今の出来事を整理しようと思っていた。　でも、整理出来ない。
　テントの中には、確かに彼女がいる。
　そんなことより、ひと晩分の薪はない。炭は、３キロくらいは持ってきている。それで、しのごうかと考えていた。

見上げると、星空が僕の身体を包み込んでいた。大きく息を吐くと白いモヤが立ち上がる。
気持ちがよかった。
テントからは軽い寝息が聞こえてきた。これで、氷点下になる星空の下で、過ごさなくてはならない現実が見えてきた。でも、星空はそんな小さなことなどお構いなしに、瞬いている。
いつの間にかウトウトしていたようだ。焚火は消えかかっていた。寒さで目が覚めてしまったのだろう。
テントからの寝息は消えていた。
そっと、テントのファスナーを開ける。
彼女はいなかった。
寝袋のファスナーは、閉まったままだった。

焚火動画をアップすると、不思議な出来事が起こった。僕が動画編集をしている時には彼女の白い手が綺麗に映っていた。ところが、ネットにアップされた映像は、見る人によって、マシュマロを焼く手が消えて見えたり、子供の手だったり、親の手だったり、恋人の手だったり、したようだ。
焚火動画は、見る人によって、違う手が見えると評判になり、プチバズリをした。
でも、パソコンやスマホの映像はひとりで見るものなので、その不思議さに気づかない人達が大半だった。
僕は彼女の笑顔を思い出して、思わず、苦笑いをしてしまう。
休暇中の、座敷童子の力はこんなものだ。

焚火の時

著　　君島恒星

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社